

# 先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

保健室登校を続ける生徒。  
教室復帰を勧めるよりも  
将棋を指し続けることを  
選んだ担任としての2年間

大阪府・私立高槻中学校・高槻高校  
磯崎陽介

いそぎ・ようすけ●同校に赴任して12年目。  
地理歴史・公民科。大学入学共通テストの世界史の  
対策指導を得意とし、休日は模擬試験の問題を解いて  
過ごす。教師としてのモットーは「まずは自分が楽しむ」。  
生徒とのかかわりでは、目線を合わせることを大切にし、  
生徒に寄り添う教師であることを心がけている。



中学2・3年次に担任としてかかわったAさんは、1年生の頃から保健室で過ごすことが多かった男子生徒でした。2年次の5月の連休明けには全く教室に来られなくなり、毎朝保健室に登校するようになりました。

保健室でAさんに声をかけても、「まあ……」「いや……」と元気がない言葉が返ってくるだけ。ただ、彼の趣味である囲碁が話題になった時だけは、少し様子が違いました。将棋が好きで私が「将棋はできる？」と尋ねると、「できます」とのこと。「じゃあ、将棋やろうよ」と誘いました。当然保健室には将棋盤はありませんから、私は「盤と駒を作っておいてね」とAさんに言いました。次の週に保健室に行くと、段ボールで作った駒を並べながらAさんが私に言いました。「先生、やりましようか」。初めて耳にするAさんの前向きな言葉でした。

それから私は、毎日のように空き時間には保健室に出向き、Aさんと将棋を指しました。次の授業が始まるまでに決着がつかない時は、対局を中断して授業に行き、授業後に保健室に戻りました。そうした私の行動を知った同僚は、将棋をAさんとのコミュニケーションの手段として認めつつも、教室復帰につながる声かけをした方がよいと私に言いました。しかし、私はAさんに「教室においで」とは一度も言いませんでした。それを言ってしまうと彼の気持ちが私から離れていく気がしたのです。たまに家での過ごし方などを聞くこともありましたが、大抵は具体的な返事はなく、受け流されることがほとんどでしたから、対局中は2人とも目の前の将棋に没頭していました。

保健室での対局は3年次になっても続きました。3年次の秋に、いわゆる選択的夫婦別姓制度のニュースが話題になっていました。私は将棋盤に視線を落としたまま、「Aは結婚したら、夫婦別姓にする？」「今、授業で日本国憲法を勉強しているんだよ」と話しかけました。Aさんは珍しく返事をしました。「今度、先生の授業の時だけ、教室に行ってもいいですか？」。思わぬ申し出に驚きましたが、私は平静を装った口調で「いいよ」とだけ返事をしました。すぐ隣にいた養護教諭は、「え！ Aさん、教室に行くの？」と驚きを隠せず、喜んでいました。それからAさんは、週3時間程度ですが、教室に来て授業やLHRに参加するようになりました。

Aさんと何百回対局したか分かりません。トータルの戦績は、4対6の割合で私の負けです。

将棋盤を挟んでAさんと向き合った磯崎先生には、どのような思いや見通しがあったのか。磯崎先生とAさんが保健室で過ごした時間と、Aさんのその後を紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article27392/>

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

イラスト：カモ